

私たちが世界でおきている現象を理解するためには、全くの白紙から考えるのではなく、何がしかの理解の様式が必要である。心理学者リチャード・ニズベットは、哲学でいうところの思考の様式（エピステモロジー）には洋の東西に大きな違いがあり、そのために同じ現象の観察から異なる知の体系が生み出されうることを指摘している。

こうした思考様式には、まず、ギリシア文明の世界観から生まれ、以来、西洋哲学において中心的な役割を果たしてきた分析的思考様式というものがある。この様式では、現象を理解するためにはノイズを除いて個々の事象そのものに備わる本質を見極めることが重要である。これに対し古代中国文明で生み出された思想を受け継ぐ東アジア文化では包括的思考様式が人々の世界観を支えている。この様式では、ある事象を理解するためにはそれ自体をみるだけでは不十分で、その事象を取り巻く周りの事象との複雑な関係を見ることが必要とされる。これらの思考様式は、それぞれの文化圏の長い歴史の中で、時に厳密な哲学理論として、時に日々の行為に表れる思考の癖として受けられてきた（図1）。

しかし思考様式が洋の東西で排他的に二分されていると考える必要はない。現象を包括的に理解する思考様式は、西洋においても主流の思考様式の背後に隠れながらマイナーキーとなって息づいてきた。そして、こうしたマイナーキーは西洋の学問体系に排除されてきた土着的思考や西洋以外の社会を研究した者から提唱されていることが多いようである。そのことを示すために西洋における人間科学の近年の動向を考えてみたい。

人間科学には西洋の学問で主流をなす分析的思考様式が色濃く反映されているため、社会文化環境というノイズを捨象した末に残る純粋な「心」というものを想定して分析的研究に推し進めてきたという歴史がある。しかし、アジア文化を長く研究した人類学者リチャード・シュウェーダーは、こうした理論的枠組みの根底にあるプラトンのイデア論的な閉塞感を看破し、そのオルタナティブとして「心」を取り巻く社会文化環境をすべて包括的に含めた形での人間理解を目指した学際的研究を提唱している。過去の人間科学の歴史を紐解けば、このような包括性への肯定的な態度は、解釈人類学が唱えた「人間の営みを厚く記述する研究」、構造人類学が唱えた「複雑な現象を単純化せずに、複雑なままに理解する科学」、あるいはロシア心理学の流れを汲むヴィゴツキー学派の「文化的・歴史的な文脈の中に生きる人間の研究」といった試みにも見取ることができる。

西洋の人間科学においてもこのような研究が出てくる理由は、人間という複雑な対象を理解する上でいままでの方法論を超越するオルタナティブが必要になっているからに他ならない。もしそうであるならば、人間科学よりも更に複雑な地球生態環境の科学に、既存の分析的研究法に対するアジアからのオルタナティブとしての包括的研究法を提案することは、このテーマを考える上でより大きなビジョンを導きだすための弁証法的な糸口を提供するであろうと大いに期待できるところである。

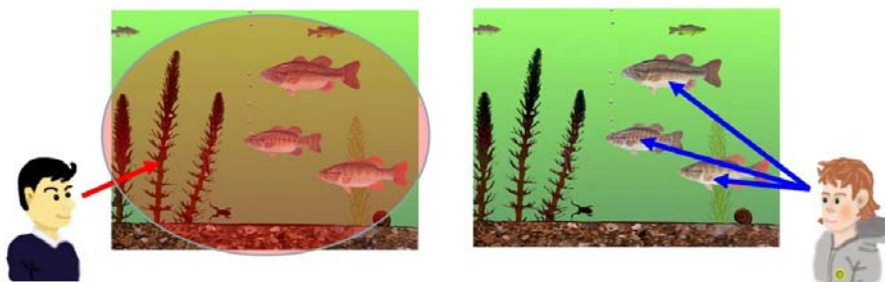


図1－包括的思考と分析的思考を端的に示すための心理学課題：アニメーション画像を呈示して内容を説明するように求めたところ、北米人は魚のみに言及するような分析的説明が多く見受けられたのに対し、日本人は画像全体について述べた後、魚に言及するような包括的説明が多く見受けられた（出典：Masuda & Nisbett, 2001）。